

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

格助詞の後ろに付くウチナーヤマトウグチ「ガ」の
用法：石垣市方言を具体例に：佳作論文

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2023-02-05 キーワード: 作成者: 座安, 浩史, Zayasu, Hirofumi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000103

格助詞の後ろに付くウチナーヤマトゥグチ 「ガ」の用法

——石垣市方言を具体例に——

座安浩史

0. はじめに

本稿で取りあげる「ウチナーヤマトゥグチ」とは、琉球方言圏で話されている伝統的な琉球方言（以下、伝統的な方言とする）と全国共通語（以下、共通語とする）の接触によって生まれたことばである。

琉球方言は本土方言と対置し、日本語の一翼を担う大方言である。文法や音韻の面でも本土方言と規則的な対応関係にあり、本土方言と姉妹関係にあることから、日本祖語研究の上で重要な存在である。

しかし、マスメディアや共通語教育の普及、交通機関の発達などにより、琉球方言圏内にも共通語が多く流入し、共通語化が顕著に進んでいる。

一方、現在の琉球方言圏内で、かつての首里・那覇方言に替わり、地域共通語的な役割を果たしていることばにウチナーヤマトゥグチがある。ウチナーヤマトゥグチは琉球方言圏内では「共通語である」として話されていることばである。

1. 本稿の目的

本稿の目的は、ウチナーヤマトゥグチの実態を明らかにすることである。とりわけ、石垣市方言における、格助詞の後ろに付く「ガ」の用法について記述する。そして、豊見城市上田方言と比較することで、ウチナーヤマトゥグチにも地域差が観察されることを示す。

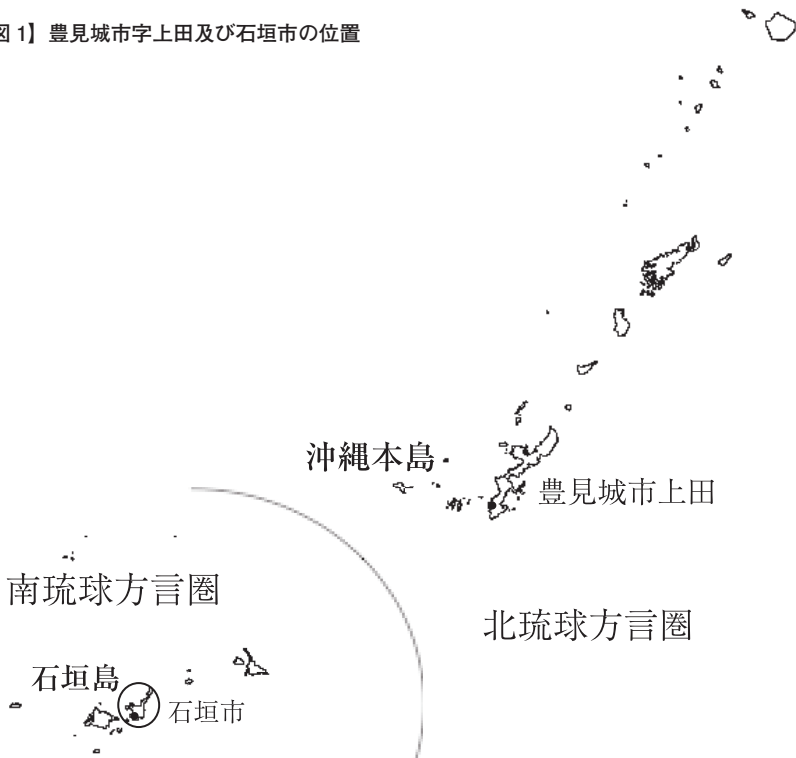
ウチナーヤマトゥグチは琉球方言圏、特に沖縄県の地域共通語として広まっている。また、ウチナーヤマトゥグチは伝統的な琉球方言の痕跡を残しており、新たな琉球方言としてみなされていく可能性もある。しかし、琉球方言圏の経済的・文化的な中心地である沖縄本島中南部方言以外の地域のウチナーヤマトゥグチについては、その実態がほとんど明らかになっていない。本稿は石垣市のウチナーヤマトゥグチの実態の一端を記述することで、ウチナーヤマトゥグチを含めた琉球方言の共

時態研究に貢献できるものである。

2. 調査地の概要

石垣市方言は^{と の しろ}登野城、^{おおかわ}大川、^{いしがき}石垣、^{あらかわ}新川の四つの字からなる。本稿ではまとめて「石垣市方言」と呼ぶことにする。石垣市方言の地域は石垣島の文化的・経済的中心地であるため、石垣市方言のウチナーヤマトゥグチを石垣島のウチナーヤマトゥグチの代表とできる。また、比較対象として、沖縄本島中南部方言に属する豊見城市^{うえた}字上田方言を取り上げる。豊見城市は沖縄県の文化的・経済的中心地である那覇市の南に隣接しており、首里・那覇方言と同じ沖縄本島中南部方言の地域に分類されている。字上田は豊見城市のほぼ中央にあり、那覇市の市街地から5kmほどの場所に位置し、那覇市への通勤・通学圏である。よって、豊見城市のウチナーヤマトゥグチは那覇市と近いと考えられる。このことから、上田方言のウチナーヤマ

【地図 1】 豊見城市字上田及び石垣市の位置



トゥグチを沖縄本島方言のウチナーヤマトゥグチの代表として扱う。具体的な位置については【地図1】を参照されたい。

3. 先行研究

ウチナーヤマトゥグチという名称は近年になって生まれたものである。しかし、桑江良行(1930)『標準語対照 沖縄語の研究』には、ウチナーヤマトゥグチと共通する用例が具体的に記述されている。恐らく、伝統的な琉球方言と共通語の接触が始まった明治期には生まれていたと思われる⁽¹⁾。外間守善(1971)『沖縄の言語史』によれば、琉球方言圏に共通語が流入するようになったきっかけとして廃藩置県がある。琉球王国だった時代には、国府の置かれた首里のことばが琉球方言の共通語的な役割を果たしていた。しかし、廃藩置県に伴い、琉球王国から沖縄県になったことによって、琉球方言圏にもいわゆる共通語が入りこむと同時に、その習得が必要とされるようになった。これにより、それまで日常的に使用されていた伝統的な琉球方言と本土方言の共通語が接触したことで、これらの混交したことばが生まれたのである⁽²⁾。

共通語は、琉球方言圏内でも話されることを求められるようになった。伝統的な方言は母語として継承されなくなり、話す世代は限られている。一方、共通語は教育やマスメディアが普及したことで琉球方言圏内にも使用されるようになった。

しかし、沖縄で話される共通語は、本土方言の共通語と全て一致するものではなく、伝統的な琉球方言の影響を受けた地域共通語の特徴を有している。それがいわゆる「ウチナーヤマトゥグチ」である。

屋比久浩(1987)「ウチナーヤマトゥグチとヤマトウチナーグチ」は次のように述べている。

「ウチナーヤマトゥグチ」の指すものは、【中略】日本語が沖縄方言に取って替わる言語転移の過程において起こった様々な干渉又はその結果うまれてきたいろいろな言語作品等を含む多種多様な言語現象である。(屋比久 1987 p295)

屋比久(1987)は、共通語が伝統的な琉球方言に替わろうとする過程での言語現象と捉えている。また、高江洲頼子(2002)「ウチナーヤマトゥグチをめぐって」はウチナーヤマトゥグチを次の様に定義している。

話者は標準語をはなそうと志向しているが、方言が基盤にあって、その干渉を

うけてあらわれる言語現象。

(高江洲 2002 p.152)

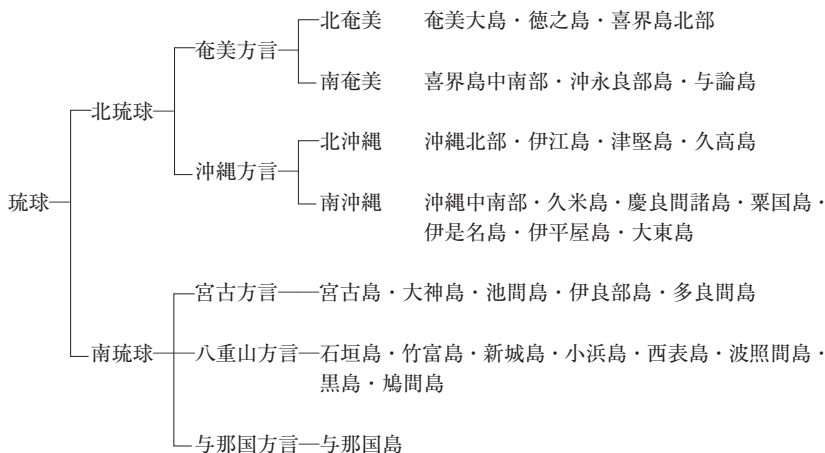
高江洲 (2002) は屋比久 (1987) の定義に、話者に共通語を話そうとしているという意識がある点を追加している。そして、「ウチナーヤマトゥグチ」の他に、共通語を沖縄方言に直訳的に置き換えた「ヤマトゥウチナーグチ」、若い世代に用いられる「ウチナースラング」を設定し、琉球方言圏内の言語事象を整理している。

また、「ウチナーヤマトゥグチ」という名称は大野 (1995) では「中間方言形の集合」と位置づけている。ちなみに、ここまで「ウチナーヤマトゥグチ」の例として取り上げた地域は、琉球方言の共通語としての役割を担っていた、首里・那覇方言が中心である。

さらに、かりまた (2008) は奄美方言における「トン普通語」や沖縄方言の「ウチナーヤマトゥグチ」を、体系の異なる琉球方言と共通語が接触したことによって生まれたことばであるとして、「琉球・クレオール日本語 (琉球クレオール)」と称している⁽³⁾。これらは全国共通語と伝統的な琉球方言が接触したことによって生まれたことばである点で共通している。

一方、「ウチナーヤマトゥグチ」という名称そのものに対する問題もある。「ウチナーヤマトゥグチ」は「ウチナー (沖縄)」のことばである琉球方言と「ヤマトゥ (大和、「本土」の意)」のことばである共通語が接触したことによって生まれた「グチ (口、「ことば」の意)」のことばである。しかし、「ウチナー」とは琉球方言で「沖縄本島」のことばである。中本 (1981) によると、琉球方言は奄美・沖縄本島を

【資料1】 琉球方言区画 (引用：中本 1981 p.26 より)



中心とする北琉球方言圏と宮古・八重山・与那国を中心とする南琉球方言圏とに大別される（【資料1】）。また、琉球方言はその最下位分類は字であると言われるほど多様性に富んでいる。そのため、その干渉を受けて現れる「ウチナーヤマトウグチ」も地域によって差異があると考えられるが、沖縄本島以外でおこなわれるウチナーヤマトウグチは、従来の分類からは外れることになる。「ウチナーヤマトウグチ」を含む、各方言圏での地域共通語に対する研究と、その総称については今後の大きな課題である。ただし、沖縄本島方言、特に首里・那覇方言は、琉球方言圏では共通語的な役割を果たしていたことから、ウチナーヤマトウグチがその代替であると考えるのであれば、この名称を使用することも可能である。

本稿では、琉球方言圏内の地域共通語の総称として「ウチナーヤマトウグチ」を使用する。また、その定義は高江洲（2002）の定義に則ることとする。

4. ウチナーヤマトウグチの具体例

続いて、ウチナーヤマトウグチの具体例を挙げる。ウチナーヤマトウグチの萌芽的現象を捉えたものとして、桑江（1930）がある。桑江（1930）は沖縄県に見られる共通語の「誤用」として次のような例を挙げている。

- かみ（髪）をつんできた。又は、かみをかつてきた。を、アタマヲキツテきた。「断髪屋に行つて早くアタマヲキツて来い」
- いく（行く）を、クル。「あす君のうちに遊びにいくよ」と云ふべきを、「あす君のイへに遊びにクルよ」
- 「へ・に・を」を脱していふ悪い習慣がある。例えば「山へ行つて来た」「那覇に行つて来た」「八月末頃になつたら」「本を読む」などを、「山行ツテキタ」「那覇行ツテキタ」「八月末頃ナツタラ」「本ヨム」
- 「から」を使用すべき所に「ヲ」を使ふ。「学校から帰つて来た僕」「学校から帰つて来ると」などを「学校ヲ帰ツテ来タ僕」「僕が学校ヲ帰ツテ来ルト」
- 「が」を使用すべきところに、「ノ」を用ふ。「雨が降つたら」を、「雨ノふつたら」

（桑江 1930 p.11, p.30, pp.32-33, p.34；漢字は新字体を用いた、符号は省略、以下同）

桑江（1930）は、これらの用法が見られる要因を「各自の故郷たる沖縄の言葉及び其の語法の上から来た、根柢のある誤謬である（p.2）」とし、共通語に対して伝統的な琉球方言の用法が干渉した結果であると考えていた。桑江（1930）はこれら

について具体的に分析しているわけではない。しかし、これらの例は伝統的な琉球方言と共通語が接触した結果生まれたことばが、琉球方言圏内に使用されていることを示すものである。

その中には、次の例も挙がっている。

- 「で」又は文語の「にて」を使用すべき所を、「カラ」。「俵で来た」「汽車で来た」「自轉車で来た」「大義丸だいぎまるで来た」などを、「俵カラ来た」「汽車カラ来た」「自轉車カラ来た」「大義丸だいぎまるカラ来た」
- 「を」を使用すべき所に「カラ」を使ふ。「校長先生があそこの道を通る」「中島なかじまさんがあそこの道を通る」「天をとぶ」を、「校長先生があそこの道カラ通る」「中島なかじまさんがあそこの道カラ通る」「天カラとぶ」

このうち、「で」に対応する「カラ」の用法は、座安（2013）が挙げているように、伝統的な琉球方言の助詞 *kara* の用法が共通語と認識されて用いられている例である。

座安（2013）では沖縄本島中南部方言に属する豊見城市上田方言のウチナーヤマトゥグチの例として、「カラ」の〈移動の手段〉の用法を記述した。また、同じ「カラ」の用法が石垣市方言（そのうち、字石垣方言）にも確認できる。以下、例を抜粋して挙げる。用例①はウチナーヤマトゥグチ、用例②は伝統的な方言を示す。

【上田方言】

①ウチナーヤマトゥグチ

沖縄は舟 カラ 行く（沖縄は舟で行く）

あの人はタクシー カラ 帰った（あの人はタクシーで帰った）

オートバイ カラ 行く（オートバイで行く）

②伝統的な方言

?utʃina: ja ɸuni kara ?itʃun（沖縄は舟で行く）

wan ne: kuruma kara tʃan（私は車で来た）

?iʃigaki nke: ɕiko:ki kara ?itʃun（石垣には飛行機で行く）

【石垣市方言】

①ウチナーヤマトゥグチ

私は車 カラ 来た（私は車で来た）

宮古は舟 カラ 行く (宮古は舟で行く)

あの人はタクシー カラ 帰った (あの人はタクシーで帰った)

②伝統的な方言

ukina: kai φuni kara ikun (沖縄へ舟で行く)

buna: kuruma kara du ki:da (私は車で来た)

džitenJa kara du ikun (自転車で行く)

上田方言、石垣市方言のどちらも助詞 *kara* が〈移動の手段〉を表している。上田方言、石垣市方言の「カラ」は、用例から明らかなように、桑江(1930)の用法と同じであるといえる。また、この用法は、伝統的な方言を母語とする老年層や方言を聞けば理解できる中年層には使用されるが、方言を理解できない若年層には使用されにくいという世代差も観察された。

本永(1994)も沖縄県の児童・生徒に使用されることばをまとめている。その中で、本永(1994)は共通語の「誤用」として、多くの用例を挙げている。本永(1994)はこれらの誤用を沖縄という地域にのみ通じる、沖縄の地域共通語であると捉え、小学5・6年生、中学生3年生、高校2・3年生を中心とした調査によって用例を蒐集し、分析を行っている。本永(1994)の調査対象者は1959年から1967年生まれで、沖縄県が1972年に本土復帰を迎える前に言語形成期を過ぎた方々であり、本稿の中年層話者に該当する。本永(1994)は次のような例を挙げている。

方言の意義が共通語の二つの語に対応していて、語形のちがうほうの意味にもちいられたばあい【中略】である。たとえば、方言の *jumuN* = 「よむ」は共通語の「読む」と「数える」に対応するため、「数える」の意味にもちいられることがある。
(本永 1994 p.223)

本永(1994)は「ウチナーヤマトゥグチ」という名称は使用していない。しかし、本永(1994)は、これらを伝統的な琉球方言と共通語の語形が一致することで用法に差が出る現象としている。したがって、伝統的な方言が基盤となって現れるという点で、本永(1994)の例はウチナーヤマトゥグチの例と考えられるものである。

このように、伝統的な琉球方言と共通語の接触が始まって以来、ウチナーヤマトゥグチが報告されている。当初は共通語の誤用であるとされることが多かったが、「ウチナーヤマトゥグチ」の名称が生まれたことで、少しずつ「琉球方言圏

内、特に沖縄県の地域共通語」という認識がなされるようになっていく。

しかし、先述のように、ウチナーヤマトゥグチには地域差があると考えられるが、沖縄本島中南部方言以外の地域のウチナーヤマトゥグチについてはあまり明らかになっていない⁽⁴⁾。そこで、次には、地域差のある例を検討していく。具体的には、沖縄本島中南部方言には観察されにくいウチナーヤマトゥグチとして、格助詞の後ろに付く「ガ」の用法を挙げる。

5. 格助詞の後ろに付く「ガ」の用法

ここでは、格助詞の後ろに付く「ガ」の用法を挙げる。なお、例文は漢字かな交じり文で記述する。ウチナーヤマトゥグチとして注目すべき点をカタカナ、伝統的な琉球方言はIPAによる簡易表記で記述する。用例の表記は音声表記を用いたが、語末の撥音はNで表す。また、共通語の助詞の具体的な用法については、国立国語研究所編『現代語の助詞・助動詞—用例と実例—』(1951)や会田・中野・中村(2011)を参考に、琉球方言の助詞用法については国立国語研究所編『沖縄語辞典』(1963)や野原(1998)、宮良(1930)、宮城(2003)を参考にした。意味用法は〈 〉で表す。アクセント表記は省略した。調査方法と話者情報については、末尾に記載する。

5.1 「ガ」の具体例

格助詞の後ろに付く「ガ」の用法は石垣市方言に顕著に確認できる⁽⁵⁾。格助詞の後ろに付く「ガ」の用法には次のような例が観察される。

- 1 蛇がガ怖い
- 2 口がガ悪い
- 3 お茶がガ飲みたい
- 4 海にガ行く
- 5 その本は家にガある
- 6 タクシーにガ乗る
- 7 母にガ笑われた
- 8 おまえとガ話したい
- 9 妹とガ行く
- 10 君からガ始めなさい
- 11 登野城でガ育った

12 鉛筆でガ書く

13 車でガ行く

このように、格助詞に分類される助詞の後ろに「ガ」が付く用法が確認される。格助詞の後ろに「が」が接続する用法は共通語には確認されない。

1から3は格助詞「が」に「ガ」が接続している。4から7は格助詞「に」に「ガ」が、8と9は「と」に「ガ」が接続している。10は「から」に「ガ」が接続し、11から13は「で」に「ガ」が接続している。

この「ガ」は話者にとって「共通語である」との意識が非常に強い点に特徴がある。また、この用法は伝統的な方言を母語として持つ老年層だけでなく、中年層や若年層話者にも観察されたことから、石垣市方言のウチナーヤマトウグチとして継承されていると考えられる。

この「ガ」は格助詞の後ろに現れ、特に「に」「と」「から」「で」には現れやすい。そして、「ガ」が付くことによって「他の物ではなくて」と強調することができる。

ここで、上に挙げた例から、それぞれの格助詞を1例ずつ抜粋し、その文の表す意味を示すと次のようになる。

1' 蛇がガ怖い ({他の動物ではなくて} 蛇が怖い)

4' 海にガ行く ({他の場所ではなくて} 海に行く)

8' おまえとガ話したい ({他の人ではなくて} おまえと話したい)

10' 君からガ始めなさい ({他の人ではなくて} 君から始めなさい)

13' 車でガ行くよ ({他の乗り物ではなくて} 車で行くよ)

また、この「ガ」の働きをモデル化すると、次のようになる。1'、4'、8'、10'、13'を例に挙げる。

1'

蛇	が
---	---

ガ

 怖い

4'

海	に
---	---

ガ

 行く

- 8' おまえとガ話したい
- 10' 君からガ始めなさい
- 13' 車でガ行くよ

このように、「ガ」が付くことによって「蛇が」「海に」「おまえと」「君から」「車で」を強調され、「他の物ではない」という意味が表される。石垣市方言の格助詞の後ろに付く「ガ」は、前に承ける名詞と助詞を強調するような働きを示すことができる。この「ガ」は世代差を問わず確認でき、用法も共通している。

5.2 琉球方言の係助詞 du について

格助詞の後ろに付く「ガ」と伝統的な方言 du は対応して現れる。伝統的な琉球方言の du は、いわゆる係助詞に分類されるものであり、野原（1998）は日本古語の係助詞「ぞ」に対応するものであるとしている。「ぞ」と du が対応するとする大きな要因としては、いわゆる係り結びを起こす点がある。

琉球方言の係助詞 du は〈強調〉の用法を持っている点も「ガ」の用法と共通する（『沖縄語辞典』 p. 178）。「ガ」を用いることで「他の物ではない」という意味が付加され、前に承ける語を強調するような働きが観察される。また、du は格助詞以外にも接続する用法がある。

上に挙げた例のうち、「が」「に」「と」「から」「で」の例を一つずつ抜粋して記述する。以下には伝統的な石垣市方言（登野城方言）を示す。二重傍線部は「格助詞+ガ」に対応している部分である。

なお、本稿の伝統的な方言とは、老年層が話す方言を指す。老年層の世代は、太平洋戦争終戦（1945年）を基準とし、それ以前に言語形成期を迎えた世代を設定している。

1" habu nu du nuguriŋa:ru

2" φʏtsi nu du barusa:ru

3" tʃa: nu du numi φʏsa:ru

- 4" tumo:ri kai du haru
 5" kunu sīmutsī ja ja: nga du aru
 6" haija: kai du nuru
 7" bune: nu uja kai du ba:rarīda
 8" wan tu du hanasī ſi: p̄ysa:ru
 9" utudu tu du haru
 10" wanu kara du hadzimirja:
 11" tunus̄iku nga du tsikana:ta
 12" jemp̄itsī ſi du kakuru
 13" kuruma kara du haru

ウチナーヤマトゥグチと伝統的な方言を比較してみると、「ガ」には du が対応して現れていることが分かる。よって、この「ガ」は du が共通語に置き換えられたものであると考えられる。

5.3 格助詞「が」に対応する語について

次に、「ガ」という語に関連して、共通語の格助詞「が」に対応する語の現れ方を整理する。そして、共通語の格助詞「が」に対応する語には格助詞の後ろに付いて〈強調〉を示す用法がないことについてみる。

地域差はあるが、琉球方言圏内において、共通語の格助詞「が」に対応する語は主に ga と nu がある。そして、これらは承ける名詞への親疎によって使い分けられている。内間(1990)はこれを「ウチ・ソト意識」と呼び、この「ウチ・ソト意識」は琉球方言話者には非常に重要なものだとしている。現在では、上田方言のように、承ける名詞の種類による使い分けになっている方言もあるが、ga と nu を使い分けようとする意識が残っている。

【上田方言の格助詞 ga, nu】

- 14 wan ga ʔitʃun (私が行きます)
 15 ʔari ga jumun (彼が読む)
 16 ʔamma: ga ʔiki ri tʃi ʔi:ta (母が行ってこいと言っていた)
 17 ko:iji ga ru wassaru (買うのがわるいんだ / 買うのがぞわるい)
 18 wata nu jamun (腹が痛い)
 19 ɕi:sa nu jari ʔattʃu:san (足が痛いので歩けない)

20 ki: nu kari:n (木が枯れる)

このように、人称代名詞の場合には ga、普通名詞の場合には nu が用いられる。一方、石垣市方言では格助詞「が」に対応する語は nu が現れる。これは内間(1990)にも報告されている。

【石垣市方言の格助詞 nu】

21 ari nu jumun (彼が読む)

22 pan nu jami aragarunu (足が痛いので歩けない)

23 dʒin nu du aru (お金がある / お金がぞある)

また、石垣市方言には格助詞「が」に対応する nu と係助詞 du が融合した Ndu という助詞も用いられる。これは nu と明確な基準をもって使い分けられているわけではない。また du の文末と呼応する働きも弱くなっている。

【石垣市方言の助詞 Ndu】

24 habu ndu iru sa: (ハブがいるよ)

25 ki: ndu kare:ru (木が枯れる)

26 bada ndu jamun (腹が痛い)

このように、石垣市方言では共通語の格助詞「が」に対応する語は nu や Ndu などの nu 系で現れ、語形として ga は観察されない。また、この nu は格助詞の後ろに付いて、承ける語を強調するような働きをすることもない。つまり、格助詞の後ろに付くウチナーヤマトゥグチの助詞「ガ」は、語形は共通語の格助詞「が」と同じであるが、「が」に対応する語の用法が干渉したものではないのである。

これは、「カラ」に見られた現象とは異なる。「カラ」の場合には、伝統的な琉球方言 kara と共通語の格助詞「から」の語形が似ているにも関わらず、〈移動の手段〉を表す意味用法が完全には一致しないことが大きな要因であった。語形が同じであることで、kara と「から」の意味用法も重なっていると認識し、使用したと解釈できる。

しかし、石垣市方言のウチナーヤマトゥグチにみられる、格助詞の後ろに付く「ガ」の場合には「カラ」とは現れ方が異なる。ウチナーヤマトゥグチは伝統的な方言の用法を基盤として現れる。ただし、伝統的な石垣市方言では、格助詞「が」は nu 系に対応して現れるため、直訳的に「ガ」にあてる語がない。よって、「ガ」

の出自は格助詞「が」に対応する語以外の要因も考える必要がある。

一方、「ガ」の〈強調〉の働きは、伝統的な方言の助詞 *du* と非常によく似ている。

ちなみに、共通語の格助詞「が」にも格助詞の後ろに付いて強調するような働きはなく、上田方言の *ga* 及び *nu* にもそのような働きは観察されない⁽⁶⁾。よって、「ガ」は用法の面ではやはり *du* の干渉を受けていると考えられる。

5.4 まとめ

格助詞の後ろに付く「ガ」は、石垣市方言に観察される。そして、「他の物ではない」という意を添え、承ける名詞と助詞を強調する働きを示す。その働きは琉球方言の助詞 *du* によく似ている。琉球方言の助詞 *du* は、中央日本語で使用された「ぞ」に対応するとされている。

しかし、石垣市方言に多く観察されることと、*du* に対応する「ガ」という語形をふまえて考えると、語形が同じであるということだけでは説明がつかない。石垣市方言では格助詞「が」に対応する語はほぼ *nu* 系で現れるため、石垣市方言と共通語の語形は異なる。ウチナーヤマトグチの特徴として、伝統的な琉球方言と共通語とで語形は同じであるが意味用法は完全には重複しないという点があった。この格助詞の後ろに付く「ガ」は意味の面には *du* の用法が干渉していることは間違いないだろう。〈強調〉の意が「ガ」という語形で現れる点については、まだ課題が残っている。

6. 格助詞の後ろに付く「ガ」の地域差

6.1 石垣市方言と上田方言の比較

ここでは、格助詞の後ろに付く「ガ」について、沖縄本島中南部方言に属する上田方言と比較し、地域差が見られることを示す。先述のように、石垣市方言話者に観察される「ガ」は、「他の物ではない」と強調する働きをもつ。この「ガ」の強調する働きは、伝統的な琉球方言の助詞 *du* と類似している。この *du* は中央語の「ぞ」に対応するとされている語である。以下、石垣市方言の *du* の例を挙げる。

【石垣市方言の *du* を用いた例】〈 〉内は直訳

27 *saba nu du* *φusa:ru* 〈草履が ぞ 欲しい〉

28 *tumo:ri kai du* *tsjikasaru* 〈海に ぞ 近い〉

29 *wanu tu du* *hanasi ji: φusa:ru* 〈君と ぞ 話したい〉

30 *wanu kara du* *hadzimirja:* 〈君から ぞ 始めなさい〉

31 ϕ udi ji du kakuru <筆で ぞ 書く>

また、27から31の例を石垣市方言のウチナーヤマトゥグチに直すと次のようになる。

27' 草履が 欲しい

28' 海に が 近い

29' 君と が 話したい

30' 君から が 始めなさい

31' 筆で が 書く

石垣市方言のウチナーヤマトゥグチ「ガ」は、伝統的な方言の助詞である du を共通語に置き換えた結果であると考えられる。また、27から31の例と、27から31'の例を比較してみると、du と「ガ」は格助詞の後ろに現れている。これは「ガ」が du を共通語化しようとした形であることを窺わせる。

一方、上田方言にも du は観察される。しかし、上田方言のウチナーヤマトゥグチでは格助詞に「ガ」の付く例は確認できなかった。石垣市方言と上田方言のどちらにも、du のつく文とつかない文は観察される。それにも関わらず、石垣市方言のウチナーヤマトゥグチには du に対応する「ガ」が現れ、上田方言のウチナーヤマトゥグチでは現れない。この「ガ」の用法はウチナーヤマトゥグチにも地域差があることを示すものである。

【上田方言の du を用いた例】

32 saba nu du ϕ usa:ru <草履が ぞ 欲しい>

33 η umi η ke: du t jikasaru <海に ぞ 近い>

34 η ja: tu du hanafi: ji: busaru <君と ぞ 話したい>

35 η ja: kara du hadzimiru wa <君から ぞ 始めなさい>

36 ϕ udi ji du katjuru <筆で ぞ 書く>

ここで、格助詞の後ろに付く「ガ」の有無について、上田方言と石垣市方言（特に石垣方言）のウチナーヤマトゥグチの例を比較する。上に挙げたうち、「28. 海に近い」「30. 君から始めなさい」「31. 筆で書く」の例で比較すると以下のようになる。参考として、du の付く例と付かない例を示す。

28. 海に近い

	伝統的な方言	ウチナーヤマトゥグチ
石垣方言	28-1 tumo:ri kai <u>du</u> tsjikasaru 28-2 tumo:ri kai tsjikasan	28' 海に <u>ガ</u> 近い
上田方言	33-1 ?umi ŋke: <u>du</u> tʃikasaru 33-2 ?umi ŋke: tʃikasan	37 海に <u>×</u> 近い

30. 君から始めなさい

	伝統的な方言	ウチナーヤマトゥグチ
石垣方言	30-1 wanu kara <u>du</u> hadʒimirja: 30-2 wanu kara hadʒimirja:	30' 君から <u>ガ</u> 始めなさい
上田方言	35-1 ?ja: kara <u>du</u> hadʒimiru wa 35-2 ?ja: kara hadʒimiru wa	38 君から <u>×</u> 始めなさい

31. 筆で書く

	伝統的な方言	ウチナーヤマトゥグチ
石垣方言	31-1 ɸudi ji <u>du</u> kaku 31-2 ɸudi ji kakun	31' 筆で <u>ガ</u> 書く
上田方言	36-1 ɸudi ji <u>du</u> katʃuru 36-2 ɸudi ji katʃun	39 筆で <u>×</u> 書く

石垣市方言のウチナーヤマトゥグチでは、「28. 海に近い」の「に」の後ろに「ガ」が付くことによって、「他の場所ではない」と強調する意が現れる。「30. 君から始めなさい」の場合にも「から」の後ろに「ガ」が付くことによって「他の人ではない」の意が加わる。「31. 筆で書く」の場合には、後ろに「ガ」が付くことで「他の道具ではない」と強調する意が加わる。しかし、上田方言のウチナーヤマトゥグチでは格助詞の後ろに「ガ」が付いて強調するような用法はみられず、共通語と同じような文が現れる。なお、特に強調する必要のない場合には、石垣市方言にも「ガ」の付かない文が現れる。

このように、石垣市方言のウチナーヤマトゥグチでは du に対応するところに

「ガ」が現れてくるが、上田方言ではみられない。その他の地域での現れ方については今後の課題であるが、石垣市と沖縄本島のウチナーヤマトゥグチに地域差があることを示すものである。格助詞の後ろに付く「ガ」については、石垣市方言話者に、世代を通して継承されている点をも、今後も使用され続ける可能性は高いと考えられる。

6.2 沖縄本島方言における「ガ」について

これまで見たように、格助詞の後ろに付く「ガ」は上田方言には観察されない一方で、石垣市方言には多く観察される。しかし、上田方言に観察されない要因は元々使用されていなかったのか、または使用されていたが消失したのかは考察が難しいところである。

沖縄本島中南部方言における、格助詞の後ろに付く「ガ」については、本永(1994)に次のような記述がある。

沖縄方言には独特の係助詞 du (古語の「ぞ」にあたる)があるが、これが「が」と訳されて地域共通語のなかにはいりこんでいる。「どこでがやるか」、「いつからがはじまるか」、「これががいいよ」、「これにが似あうよ」などのような言い方である。
(本永 1994 pp.224-225)

この「が」の用法は、本稿で取り上げた「ガ」の用法と共通するものである。本永(1994)は沖縄本島中南部方言に属する話者を対象としている。そのため、沖縄本島中南部方言にもウチナーヤマトゥグチ「ガ」が確認されていたことになる。したがって、沖縄本島中南部方言にもかつては使用されていたが、徐々に使用されなくなったと考えられる。その要因が、いわゆる共通語化によるものなのか、伝統的な方言の違いによるものなのかについては琉球方言圏全域での現れ方を見る必要がある。

「ガ」と du のどちらも、格助詞の後ろに付き、〈強調〉を表す点は共通している。よって、石垣市方言に顕著に現れる「ガ」には、共通語の格助詞「が」に対応する語の現れ方と係助詞 du が大きく関係していると推測する。「が」に対応する語の現れ方は琉球方言圏内でも地域差が現れる。「ガ」の地域差と合わせて考える必要がある。

7. おわりに

本稿ではウチナーヤマトゥグチに地域差があることを、格助詞の後ろに付いて強

調する「ガ」についてみることで示した。その他の地域での現れ方については今後の課題であるが、琉球方言圏内の地域共通語であるウチナーヤマトゥグチも一律ではないことを見ることが出来た。

ウチナーヤマトゥグチは、伝統的な琉球方言と共通語の接触によって生まれたことばが、共通語でも伝統的な琉球方言でもない、新しい方言体系を生みつつあることを表わすものである。また、ウチナーヤマトゥグチの特徴を保ちやすい面と共通語の体系を受け入れる面があることも示唆する。特に助詞は、語形や用法も類似していることから、伝統的な方言の用法が反映されやすく、共通語との違いが意識されにくい。そのため、ウチナーヤマトゥグチとしての特徴が保たれ、世代を通じて継承されやすいのだろうと考えられる。

ウチナーヤマトゥグチの実態は一様ではない。ウチナーヤマトゥグチの地域差は伝統的な方言の体系の差異を反映しているものである。現在の琉球方言圏で伝統的な方言が衰退しつつある中で、ことばの使用実態を調査し分析することは琉球方言の今後を考える上で非常に重要なことである。本稿で取り上げた「ガ」についても、沖縄本島方言や石垣市方言以外での調査を行い、地域差をより明確に把握する必要がある。

また、「ガ」以外のウチナーヤマトゥグチについても調査を行い、その実態を明らかにしたい。中年層や若年層における、ウチナーヤマトゥグチと「方言」の使い分け等も含め、現在の琉球方言圏に行われる言語生活の実態を捉えることも今後の大きな課題である。

付記

本稿は、以下の発表の内容に加筆・修正を加えたものである。

座安 浩史 (2014) 「南琉球方言石垣市方言のウチナーヤマトゥグチの助詞「ガ」について」『第99回日本方言研究会 研究発表会原稿集』25-33

注

- (1) 明治13(1880)年には、首里方言と共通語を対訳させた『沖縄対話』が刊行されている。これは共通語習得のための教本として作成されたものである。
- (2) 桑江(1930)は全国に通用することばとして「標準語」という語を用いているが、本稿の「共通語」と同義であると考え、「共通語」とする。高江洲(2002)の「標準語」も同様に「共通語」とする。
- (3) 「トン普通語」についてはダニエル・ロング(2013)にも記述がみられる。
- (4) かりまた(2008)や永田(2009)はウチナーヤマトゥグチの地域差についても言及している。
- (5) 座安(2014)参照。

- (6) 「が」によって承ける語を強調するような働きをもつことは山崎(1965)に述べられている。山崎(1965)は格助詞「が」「の」の相違について、「助詞『の』が順行的に上接語から下接語へと強い粘着力をもって結合させていく機能を持っているのに対し、助詞『が』はもっぱらその上接語に意味の主点または重点をおくような機能を担っている(p.405)」とし、「助詞『が』は、主語格表示の機能をもつと解してよい(p.411)」ことを述べた。石垣方言のウチナーヤマトゥグチ「ガ」も前に来る語を強調するという働きと通ずるところがあると考えられる。

【調査方法】

本稿で記載した資料は、2012年から2015年までの臨地調査によって得られたものである。調査は各地の生え抜きの話者を対象にしている。調査方法は面接による聞き取り形式で、ウチナーヤマトゥグチの文を筆者が読み上げ、それを使用するかどうか、共通語との使い分けがあるかどうかを聞いた。また、共通語との使い分けがあるとした場合には、それがどのように使い分けられているかを説明してもらった。なお、伝統的な方言も適宜ウチナーヤマトゥグチに翻訳してもらった。

【話者情報】(年齢は調査当時)

本稿では、沖縄県の社会的背景を考慮し、1945年以前生を老年層、1945年以降1972年以前生を中年層、1972年以降生を若年層と設定している。1945年は太平洋戦争終戦、1972年は沖縄県の本土復帰の年であり、沖縄県に共通語が入る要因となったと考えたためである。

石垣市方言 老年層：①男性 大正12年生 90歳、②女性 昭和2年生 87歳、③女性 昭和9年生 79歳、④女性 昭和10年生 78歳、⑤男性 昭和11年生 78歳、⑥女性 昭和12年生 77歳

中年層：⑦男性 昭和25年生 63歳、⑧女性 昭和26年生 62歳、⑨女性 昭和33年生 55歳、⑩男性 昭和35年生 54歳、⑪女性 昭和36年生 53歳

若年層：⑫男性 昭和62年生 27歳

上田方言 老年層：⑬男性 昭和6年生 83歳

中年層：⑭男性 昭和31年生 58歳

若年層：⑮男性 昭和63年生 23歳

【参考文献】

- 会田 貞夫・中野 博之・中村 幸弘 2011『学校で教えてきている現代日本語の文法』右文書院
石垣市史編集委員会 編 1994『石垣市史 各論編 民俗上』石垣市
内間 直仁 1990『沖縄言語と共同体』社会評論社
大野 眞男 1995「中間方言としてのウチナーヤマトゥグチの位相」『言語』24-12 大修館書店
沖縄県教育委員会県立学校教育課 編 2014「第四章 ウチナーヤマトゥグチ」『高校生のための「郷土のこぼし」～沖縄県(琉球)の方言～』沖縄県教育委員会
かりまた しげひさ 2008「トン普通語・ウチナーヤマトゥグチはクレオールか—琉球・クレオール日本語の研究のために—」『沖縄国際大学南島文化研究所紀要 南島文化』第30号 沖縄国際大学南島文化研究所
桑江 良行 1930『標準語対照 沖縄語の研究』青山書店
国立国語研究所編 1951『現代語の助詞・助動詞—用例と実例—』
国立国語研究所 編 1963『沖縄語辞典』大蔵省印刷局
座安 浩史 2012「南琉球・石垣市方言の助詞「カラ」の用法—ウチナーヤマトゥグチの観点から—」『首都圏方言の研究』第3号 國學院大學大学院文学研究科久野研究室
座安 浩史 2014「ウチナーヤマトゥグチの助詞「ガ」の用法について」『國學院大學大学院紀要—文学研究科—』第45輯
柴田 武 1965『生きている方言』筑摩書房

- 高江洲 頼子 1994「ウチナーヤマトウグチ—その音声、文法、語彙について—」『沖縄言語研究センター研究報告3 那覇の方言』沖縄言語研究センター
- 高江洲 頼子 2002「ウチナーヤマトウグチをめぐって」『国文学 解釈と鑑賞』第67巻7号 至文堂
- ダニエル ロング 2013「奄美大島のトン普通語と沖縄本島のウチナーヤマトウグチの言語形式に見られる共通点と相違点」『日本語研究』33 87-98
- 永田 高志 2009「ウチナーヤマトグチ発生のメカニズム」『日本語学』11月臨時刊行号 第28巻第14号 明治書院
- 中本 正智 1981『図説 琉球語辞典』力富書房
- 野原 三義 1998『新編 琉球方言助詞の研究』沖縄学研究所
- 外間 守善 1971『沖縄の言語史』法政大学出版局
- 宮城 信勇 2003『石垣方言辞典』沖縄タイムス社
- 宮良 當壯 1930『八重山語彙』東洋文庫
- 本永 守靖 1994『琉球圏生活語の研究』春秋社
- 屋比久 浩 1987「ウチナーヤマトウグチとヤマトウチナーグチ」『国文学 解釈と鑑賞』第52巻7号 至文堂
- 山崎 良幸 1965『日本語の文法機能に関する体系的研究』風間書房